

透視像



おくれ人

太田 伶

近頃テレビで見る医療の現場は、まるで精密機械工場のようにメカニックだがわが通つ病院も、おくれればせながらの電子化で、各科外来の机上には液晶画面やキーボードが所狭しと立ち並ぶ有様となった。

パソコンはおるか、携帯電話すら持つていないわが老ドクの身ではなすすべもなく、失職の危機に立たされたが、そこは救つ神もあつて、かかる身体障害者には特別に助手を付けてくれることになった。そのお陰で画面の操作をしないでよい分だけ患者と向かい合つて話し合う時間も多く、近頃の先生は画面ばかり見ているという、電子化故の患者の非難からも免れることができた。

次はテレビからの情報だが、最近の若

者は日本では勿論のこと、本場のアメリカ人ですら、英語を筆記体で書けないよし。日本の学校では英語字という課目はないしアメリカでは講義のノートはパソコンでとるそうなので、このことは必然の結果である。

つまり筆記という手法がもはや無用になつたのである。私のようなおくれ人はパソコンの手紙では何か味気ない気がするが、そのうち逆に手書きで失礼という時代がくるかもしれぬ。

とすれば前記医療現場での患者の不評は、その患者自身がまた筆記体時代の人間であるためで、そのようなおくれ人が死滅してしまえば、外来で医者か画面ばかり見ているのは当たり前で、なまじ顔など見たらこの先生は古いといつことになりかねない。

しかしその一方で、きわめて近い将来海の藻屑と消え去るおくれ人にとつては生きている限り筆記体を守り続けることこそが、それだけ余計おくれ人の使命のよつにも思えてくるのである。

編集後記



()

久しぶりに東京ドームで野球観戦。海外勤務の長かった甥はT党、G党の私とはいわば巨越同舟。ゲームは前半がGの圧倒的優勢、後半はTが大逆転、劣勢だからといって諦めないこと。つい本クラブと重ね合わせました。もう一つ巨越同舟には「敵味方が共通の困難や利害に対して協力する」(巨越死)の意も、各部が連携して再建へ励みたいですね。

今号は機関誌の「役目」として広報を随想の前に割り付けました。医学会総会へのイベント参加を成功させたいといつ強い願いからです。美術・写真・書道の合同展が実現して、会場でコンサートも開けたら最高ののですが。

原稿のやり取りの中で、ちよつとしたお頼りが添えてあります。桜の開花具合から日本列島は細長いことを実感、一方日常の暮らしぶりも、「高齢な方々のいっそこの健康と活躍を願っています」。